

雑音帖 No. 2

～「オーディオブック」～

瀬野豪志（蘇音）

「録音」というと、マイクロフォンなどのスタジオにある専用の機器や、レコード、磁気テープ、CD、音声ファイルなどの記録媒体を思い浮かべるかもしれません。そして、演奏者やプロデューサーが作業している様子や、自分が記録媒体を使ってきた経験から、「音楽」を連想しやすいのではないのでしょうか。

しかし、それは20世紀に確立した、商品として流通する「レコード」、すなわち再生することしかできない記録媒体という、特殊な録音再生技術のデザインによる「音楽」です。レコードを購入して専用の再生機器で聞き、録音するにしてもレコードからテープなどに移す「複製」や「ダビング」のために使っているのなら、それは「録音されている音楽」を聞くことが多いかもしれませんが、録音して再生する技術を自分で「録音する」のに使うのであれば、録音機材を使って音楽を制作しようとするよりも、おしゃべりや出来事を録音する方がすぐにできるでしょう。そう言われてみれば、写真や映像を撮影するように、自分で録音したことがあるのを思い出すかもしれません。例えば、「ホームビデオ」には、音声も収録されているはずですが、案外、わたしたちは「音楽ではない」音声を録音しているものです。

自分で「録音する」としたら、あなたは何を録音しますか。何のために「録音」を使いますか。

トーマス・エジソン

1877年に録音ができる機械の「フォノグラフ」を発明したエジソンは、1878年6月の「ザ・ノース・アメリカン・レビュー」誌で、フォノグラフの用途を提案しています。

- ・「手紙を書く (Letter Writing)」
- ・「口述 (Dictation)」
- ・「本の朗読 (Books)」
- ・「教育目的、授業 (Educational Purposes)」
- ・「音楽の再生 (Music)」
- ・「家族の記録 (Family Record)」
- ・「録音の本 (Phonographic Books)」
- ・「オルゴールなどのおもちゃ (Musical-Boxes, Toys, etc.)」
- ・「おしゃべりする人形などのおもちゃ (Toys, Talking dolls)」
- ・「時報、声で知らせる時計 (Clocks)」
- ・「客引き、宣伝など (Advertising, etc.)」
- ・「演説や話し言葉の記録 (Speech and other Utterances)」
- ・「電話の改良、通話の記録 (Telephone)」

このうち、音楽に直接関わっているように思われるのは「音楽の再生」と「オルゴールなどのおもちゃ」です。ただし、「音楽の再生」といっても、エジソンが想像していたのは、友人に「歌」を聞かせるイタズラ（昨晚からの仲間が寝ているところを起こす「モーニングコール」など）や、教師が子どもたちに「歌」を覚えさせるといったようなことです。今であれば、その他の用途でも声に合わせて付随する音楽を入れようとするかもしれませんが、当時は一緒に演奏することなしには音楽を付随させるような録音はできませんし、自分の歌の使い道などというのも、たとえ自信があったとしてもそんなには思いつかないでしょう。エジソンの「音楽の再生」の用途は、記録されたままの形で繰り返すことができるという利点から考えられており、聞くだけで覚えるようなことや、気を引いたり笑わせたりする、というようなことが想像しやすかったようです。「歌」が「音楽の再生」であるとは言っても、一回性が含まれる音楽的な表現を完全に繰り返すということか、あるいは声のうちにある音楽的な要素を再現するのと同じようなこととして挙げているのかもしれませんが（初期のフォノグラフの実演では、「詩」の朗読を録音して再生することが行われています）。

電話の改良として「通話」の記録・保存を考えていたエジソンは、「口述」の記録という用途から「録音」の発想を広げています。「手紙を書く」と「口述」という用途は、速記者がいなくても文書がすぐに作成できることや、声で本人の確認ができることなどのように、ビジネスでの事務的な用途を示しています。

エジソンは「おしゃべりする人形」を実際に商品化し、その「人形」に仕込むために録音された「声」が残っています。

Hear Edison Talking Doll Sound Recordings

(Thomas Edison National Historical Park)

<https://www.nps.gov/edis/learn/photosmultimedia/hear-edison-talking-doll-sound-recordings.htm>

エジソンの「おしゃべり人形」は、子どもには怖がられたり、壊れやすかったりして、短期間のうちに製造されなくなると伝えられています。エジソンは「動物(鳴き声)」や「機関車(作動音)」のおもちゃもできるのではないかと考えていました。「時報、声で知らせる時計」も、「口述」の録音から発展させた「おしゃべりする機械」といえるかもしれません。こうした「人間ではない声」は、今も「音楽ではない」録音で考えられている用途のひとつです。

トーキング・ブック (talking book)

エジソンは「本の朗読」で、朗読の専門家が読むことによる、目の不自由な人のための本という録音を提案しています。このような録音は、1930年代からアメリカのAFB (American Foundation for the Blind) で録音されるようになった「トーキング・ブック」のレコードや、日本では1950年代から点字図書館などで録音されてきた「録音図書」のテープで知られています。

Talking Book Topic (March 1939), AFB Talking Book Exhibit.

<http://www.afb.org/talkingbook/talkingbookgallery.asp?FrameID=156>

Audio Clip, AFB

<http://www.afb.org/info/75-years-of-afb-and-talking-books/audio-clips/25>

「本の朗読」の他に、エジソンは「録音の本」という可能性についても書いています。ともに「本」という言葉があるので同じことのように思われるかもしれませんが、「録

音の本」の提案では、印刷された本との比較をしています。つまり、初めから「録音」によって本にするという可能性について書かれています。そのような「録音の本」は、印刷された本と比べてどのような違いがあるのかということ、エジソンは想像して書いたわけです。もし、初めから「録音」の本として制作するのであれば、著者のどのような表現まで記録されるのか。読者もこれまでよりも広がるのではないかと。そして、それは将来の世代にとっては、言語（Language）の貴重な記録として保存されることになるのではないかと、ということを指摘しています。言語の記録という点は、「本」として録音されたものではなくても、「演説や話し言葉の記録」にも、また「歌」の録音にも通じる場所があります。これまでに録音されてきた「声」が語学のために利用されているのはよく知られているでしょう。

文学の「作品」を読んだことになるのか

エジソンの「本の朗読」と「録音の本」の発想は、現在の「オーディオブック」にもつながっています。しかしながら、これまでの「録音」の歴史においては、口述記録からオーディオブックへの過程は、あまり重要なものとして扱われてはいません。その理由として、文学の「作品」をどのように考えるかということと関連しているのですが、レコードなどの録音を聴くことが本格的な「読書」になるとは考えられてこなかったということがあります。印刷された本を「黙読する」ことが文学作品を読むことであるという考えと、主としてレコードの録音との関係からくる問題です。

録音の場合、レコードなどの記録媒体の都合から、収録できる時間に限りがあるので、長編の作品を朗読するとなると、かなりの量の記録媒体が必要になります。どんなに長くても、少しずつ分けて録音すれば決して不可能ではありませんが、印刷された本で発表されている作品を朗読する場合、印刷なら多くても数冊で済むのに対して、レコードでは何十枚、何十巻となってしまいます。

長編作品の完全な「朗読」が録音されにくかったことは、不完全な抜粋が多いことや有名な長編作品が少ないということにもつながり、「録音図書」の利用者の他には、朗読で文学作品を「完読」する読者があまりいなかったという点はあるのかもしれませんが。

しかし、初めから「録音」で制作する「録音の本」では、文学作品の「完読」とは少し異なる方向の展開がありました。例えば、「教育目的」や「読み聞かせ」のレコードです。原作からの抜粋ではなく、翻案のダイジェスト版で内容がわかるように制作する

方がレコードには適しており、原作には忠実ではないですが登場人物がやりそうなことをする一人芸のようなものが録音されるようになります。そのような例として、ディケンズの作品のキャラクターをもとにしたレコードで人気があったバティス (William Sterling Battis) という芸人の録音がよく知られています。だいたい3分間で終わる内容になっています。

大悪人の「ユーライア・ヒープ」

Uriah Heep (Character impersonation from Dickens) (1916), Library of Congress.

<http://www.loc.gov/jukebox/recordings/detail/id/4470>

のんき者の「ミコーバー」

Micawber (Character impersonation from Dickens) (1916), Library of Congress.

<http://www.loc.gov/jukebox/recordings/detail/id/4471>

こうした録音は、子どもにとっては読むよりも理解しやすいのではないか、むしろ音声の表現が豊かである点で子どもには良い効果があるのではないかという発想につながり、1910年代からヴィクターなどで教育用のレコードがたくさん制作されるようになります。

放送が始まってからのラジオドラマも、マイクロフォンの前だけでストーリーを成立させるという意味で、「録音の本」から「オーディオブック」への過程に関わっています。「火星人襲来」のニュースだと勘違いした聴取者がいたとも伝えられる、オーソン・ウェルズの「マーキュリー放送劇場」によってラジオドラマ化された、H・G・ウェルズの『宇宙戦争』の放送の録音が残されています。突然の臨時ニュースと現地からの中継が何度も入ってくる形に翻案されており、劇中劇のような、ラジオ放送中の「ラジオ番組」になっています。

The War of the Worlds (October 30, 1938), The Mercury Theatre on the Air

<http://sounds.mercurytheatre.info/mercury/381030.mp3>

「教育用レコード」にしても「ラジオドラマ」にしても、まるでキャラクターが見えるかのような「音声」によって、むしろ「舞台化」するように文学作品を拡張することができると考えて制作されていたようです。初めから「音声」で作品とする発想から生まれる「架空のキャラクター」や「人間ではない声」は、文学作品との関係だけでなく「音

楽ではない」録音の可能性を考える上でも、とても重要な用途です。

郵送するカセットテープ

「オーディオブック」という言葉が定着したのは、1970年代にカセットテープでの郵送によるレンタルサービスが英語圏で始まり、目の不自由な人だけでなく一般の「読者」にも利用されるようになったときであるとされています。日本の「録音図書」では、カセットテープで制作されるようになると、朗読の他にも様々な自主制作のカセットテープが録音され、目の不自由な人も含めた個人の間で「街で歩くための情報」などが交換されていました。そうした「録音図書」のカセットテープがわたしの手元に何本かあります。

「こんにちは、〇〇です。…みなさん、歩くことについて、
大変困っておられるわけですね。そこで、その辺を私なり
の経験をもとにして、お話をしてみようかと思えます…」

あなたは何を録音しますかと問いましたが、録音されているものを聞くだけでなく、自分で録音して誰かに聞かせるとすれば、「音楽ではない」何かを録音する可能性もたくさんあるのではないのでしょうか。例えば、住んでいる地域の紹介をする音声ガイドのような録音も、記録媒体が何であれ、再生する方法がどのようなものであれ、「音楽ではない」もうひとつの「録音」の歴史に連なる用途です。

文化が形成されていく過程において「音」はどのように関わっているのか。その音の技術の歴史研究やサウンドスタディーズによってその過程が明らかにされるとともに、自分で「録音する」ことでその過程に関与していくのも大事ではないかと考えています。そのような意味で、蘇音では「オーディオブック」を制作する活動を行っています。



今回の蘇音カフェは、「オーディオブック」というテーマで、これまでに扱った「音」を振り返ります。これまでに参加してくださった方から「またあの音が聞きたい」というリクエストがあれば、その場で応じます。録音に含まれている「歌」、「演説」、「朗読」、

「ナレーション」、「アナウンス」などを「ことば」の口述録音として聴き取り、口述する・録音する側の事情や「オーディオブック」としての可能性について考えます。

【文献】

Thomas A. Edison, *The North American Review*, Vol. 126, No. 262 (Jun 1878), pp. 527-536.

<http://www.jstor.org/stable/25110210>

Edison Talking Doll Recordings, 1888-1890, Thomas Edison National Historical Park

<https://www.nps.gov/edis/learn/photosmultimedia/edison-talking-doll-recordings-1888-1890.htm>

75 Years of AFB and Talking Books, AFB (American Foundation for the Blind)

<http://www.afb.org/info/75-years-of-afb-and-talking-books/2>

日本点字図書館 録音図書について

<http://www.nittento.or.jp/about/scene/recording.html>

Audio Recording, Library of Congress

<https://www.loc.gov/audio/>

The Mercury Theatre on the Air

<http://www.mercurytheatre.info>

Matthew Rubery (ed.), *Audiobooks, Literature, and Sound Studies*, (Routledge, 2011).